

「絵本合法辻」の立場の太平次

大阪芸術大学 文芸学科 教授 出口逸平

歌舞伎「絵本合法辻」は1810（文化七）年5月江戸市村座で初演された。立作者は勝俣蔵、のちの四代目鶴屋南北である。佐枝大学之助と立場（たてば）の太平次という二人の悪党が跳梁する作品世界が評判となり、現代まで繰り返し上演される人気演目となった。今回はとくに「庶民の悪」を象徴する立場の太平次に的をしぼり、その特徴を探ってみたい。

1 残虐な殺し

全七幕のうち、太平次が登場するのは後半の四幕目「四条河原の場」からだ。五幕目「道具屋の場」では懇意の後家おりよを毒殺し、仲間のうんざりお松もあっさり古井戸に投げ捨てる。六幕目「倉狩峠の場」では自分の女房おみちを手掛け、さらには与五郎およね夫婦を惨殺する。

太平次、およねが疵を見て、

太平次 ヤ、大事の玉を疵物にしやアがつた。モウ、これじやア、こいつもひけものだ○ ヲヲヲヲ、どんさ布子を血だらけにした○

トいろいろ見て、

アア、おいしいものだ。

トおよねを切下る。これより式人を存分に切て、トド、与五郎をきり倒し、上に乗かかり、

立よるおよねを引付、脇腹に刀を突込。（略）うぬら夫婦は連立て、地獄の道の先触に、死出の山から三途の川、手に手を取てうしやアがれ。

生身のおよねを「どんさ布子」（どてら）同然に扱い、最後は夫婦ともどもずたずたに切り刻むさまは、残虐非道というほかはない。

2 巧みな口説

とはいえ彼はただの粗暴な殺人犯ではない。むしろ鋭い観察眼で相手の心理を読み、巧妙に言葉の罠を仕掛けて相手を懐柔しようとする。

他人の心中を見分ける太平次の眼力は抜きん出ている。たとえば道具屋与兵衛が、自分の顔を見て苛立つのは、瓜二つの大学之助が長兄高橋瀬左衛門を殺したからだと見抜いている。

兄御さま（注・瀬左衛門）、非業にお果なされてより、敵を打ふと思召し、中あに高橋弥十郎さまは、霊亀の香炉を紛失の、その科ゆへお手討とやら、こここそ日頃町人の、いらざる剣術お役にたち、与兵衛さまが敵討と、思ふに付て私を、御覧うじる度々むねんの御顔。さてこそあなたが御心は、と睨れながら心の嬉しさ。

そして最近の与兵衛の放蕩三昧の生活も「あいそをつかさ、勘当請、のぞみを叶へる心で有ふが」と、わざと養家から勘当され、後顧の憂いなく敵討に専念したいという与兵衛の思惑をずばり言い当てる。さらに「睨れながら心の嬉しさ」という言葉で、自分は与兵衛の味方であることを暗に示すのである。こうした「深切らしい」言い回しで、彼はお松やおよねも手なづけている。

もちろんそんな計略がいつも成功するわけではない。その口説が通じないとなると、一転して暴力に訴えるという二面性にこそ、太平次の本性が現れる。おりよを毒酒で殺し、故郷の倉狩峠の立場（宿場と宿場の間で、旅人や人足が休息する場所）に身を隠そうとする太平次にとって、「わつちを引あげ、何所ぞこつそりおつな所へ、所帯を持してくんねいな」とねだるお松は、もはや足手まといでしかない。そう感じた彼は、井手端でお松に水を汲ませる。

お松、いろいろしてくむ内、釣べのなわ首すじへまとふ。

お松 これな、きざだ。この縄をとつてくんねへ。

太平次 どれ、このなわか。

トとるふりをして、縄先をとらへぐつとしめ殺す、お松アツトもがくを、そのまま足をすくつて、井の内へポントうち込。チョント拍子木の頭、井戸の内をのび上がつて何う

彼の行動に、恐れやためらいはない。ただ動物的な勘の鋭さが際立っている。

3 愚かな道化

こうして口説と暴力を取り混ぜて生きてきた太平次だが、そんな彼にも一つの望みがあつた。それは「大学さまがわしをかいこんで（注・評価して）、高橋がゆかりのやつらなら、かたづけてくれるとおたのみ」とあるように、高橋側の係累を始末して、佐枝大学之助に武士として取り立てられることである。もともと太平次は大学之助に徒士奉公していた。「三度飛脚の太平次が、大学さまに頼れて、いはば国主の御名代」という台詞も、彼の出世願望を端的に物語っている。そしてその願いは、「高橋一ツ家に心をはこぶ、下部の孫七（注・与五郎）、およねもろとも殺害に及び候ほうびとして、押込御免のうへは、新地五百石あておこなふもの也○ 左枝大学○」のお墨付きによって約束されたかにみえた。

ところが七幕目「安井福屋の場」で、仲居のお縫は兄孫七の死を聞き、太平次を疑って浴びるほど酒を飲ませる。有頂天の酔っ払い、そこで自ら墓穴を掘る。

太平次 金の出来るくちはいくらもある。

お縫 そりやどこになア。

太平次 おしつけ五百石の、おれはさむらいになるは。

お縫 何を口から出しだいに。うそうそ。

太平次 手まへに嘘をいふものか。

眠り呆けた太平次の懐からお墨付きを取り上げ、事の真相を知ったお縫は太平次を討って、敵討を果たした。結局一枚のお墨付きが出世ではなく、死を彼に与えることになる。南北らしい、皮肉な結末であった。

このように太平次は滑稽な悪党、「悪の道化」として造形されたことがわかる。その彼と「武家の悪」の佐枝大学之助とはどのような関係にあるのか。それについては、稿を改めて考えることにしたい。